

すこと、これのみが絶対に斷絶せる神に近付き得る途でなければならぬ。即ち罪人が罪の赦しに絶望しつくす間に、かれはまさしく神に向つて進んで行つてゐるのである、それゆゑに人は神に餘りに近付くならば神に遙かに離れてをり、神から絶対に離れてゐる間に神に近付いてゐるのである。そして罪は吾々を神から絶対に斷絶せしめる根源であるとともに、吾々を神に近付ける媒介者でもある。そしてこゝにかの『絶対的差異性をば絶対的同一性のうちへ止揚する』といふ『絶対的逆説』が解かるべき根拠がある。そしてこのやうな絶対的逆説こそやがて、信仰そのものの本質でなければならぬ。かのテルトゥリアヌスの所謂『不合理なるがゆゑに吾れ信ず』(Credo quia absurdum est)といふことこそ信仰の逆説の深き表現でなければならぬ。

瑠璃音聲考

一 梵漢對音の問題

水谷 眞成

凡そ、言語學のうゑから申しますと、借用語、外來語とよばれますものは、音聲、音韻を研究する立場のものにとりまして、重要な資料となるものであります。とりわけ、印歐系統のものに對するこの面の研究につきましては、一部門を設立してまで西歐に於て特別の注意がはらわれてきておりますが、中國は今日まで殆ど研究されていないといつてよいでしょう。ここに取上げました梵漢對音の問題も、當然、音聲、音韻の場面に於ては語學的操作を駆使して論じられなくてはならないものでありますが、案外、方法的に進歩していない現状であります。

十九世紀の中葉、S. Julien (フランス) によつて梵漢對音の研究がはじめて語學的に取上げられました。そののち、Eitel (イギリス)、Schlegel (オランダ) の人たちにによりまして、いろいろの修正が加えられ、Karlgren (スウェーデン)

にも重要資料との折紙が附せられました。然し、このやうな修正とよりよき研究という過程を踏んできましたにもかかわらず方法的にはどれも依然として Julien の研究領域を一步前進したものではありませんでした。近くは、周法高の『漢譯音聲考』(中央研究院歷史語言研究所集刊第十四本) を見てみましても同じことがいえます。

總じて、かれらの方法は、純粹梵語と轉寫漢字を直結して考察し、そこに何の疑問をもさしはさんでおりません。例えば、周法高の論説を出してみますと

「瑠璃」と「vaṇṇiya」

を直接に結びつけているばかりでなく、しかも「吠瑠璃」、「壁流離」、「吠努瑠野」などをすべて「vaṇṇiya」の型に結びつけても考察を進めているのであります。このことは歴史的立場から見直しますと、明らかに方法的缺點を覆うことはできません。轉寫漢字にいろいろの型態がありますように、その對音にも當然、生きた言語としての variant がなければなりません。特に轉寫漢字は、西

北印度、中央亞細亞の音聲體系を考慮にいれないで論じられるはずのものでないことが、近來とみに強調されていることでもあります。このような點から、「vaidīrya」の variant を歴史、地理的に追求してみますと、別に諸君のお手許にプリントで示しましたように、ほら、次のような結果が現われるのであります。

① 「瑠璃」その他の二音節轉寫は、

Saka Khotanese の * rīlā 或は

* rīlī に對應する。

② 「吠瑠璃」その他の三音節轉寫は、

Pkt. * virulī 或は Kuchean の

vairulī に對應する。

③ 「轉寫利夜」などは、Skt. vaidurya

或は vaidūrya に對應する。

④ 「吠努瑠野」は、Saka Khotanese

或は Kuchean の vaidūrya に

對應する。

〔註〕 この論證については、いづれ、別の機會に詳細に發表したいと考えている。今回は以上四種の結論をあげるに留める。

なお、ここに述べました「對應」といいますことは、音聲、音韻の對應をいう

のでありまして、出自をいうのではないことを御諒承下さりとう存じます。

かような對應を見てのち、はじめて梵漢對音の研究は語學的基礎を確立するのでありまして、しかも、ここがその出發點なのであります。ちなみに、この觀點にたつてみますと、例えば、玄奘三藏が譯經中に「吠瑠璃」、西域記に「瑠璃」の語を用いておりますが、決してかれの腦裏に「梵語を現わす漢字」という意識が働いていたのではありませんで、もはや中國語となつた語を取扱つたにすぎないといえましようことを最後に述べてこの話を終りたいと思います。(平野記)

念佛の勝義について

藤原幸章

淨土教に於いては念佛がその教義の中心であるにも拘らず、ともすればそれは誤解と論難の渦中にもまれぬいてきたといえる。つまり念佛は元來力弱きものへの方便説であつて、淨土教徒のいうような絶対のものではないというにある。これに對して古來の淨土教徒は念佛そのものの無限性絶対性即ち念佛の勝義を顯彰するべくその熱情を傾けて來たのであつて、例えば道綽や善導が試みた別時意會通の如きは即ちその適例である。この意味からいへば淨土教の歴史はまた念佛の勝義顯彰のための歴史であるといつていい。私はいまここにこうした歴史の頂點に法然門下の諸教學が位するものと考へ彼等がこの問題をいかにうけとりいかに體系づけたかという一點を顧みてゆきたいと思う。そうしてそこに念佛信仰に絡まる今日の問題に對しても、これにこたえてゆく一つの手がかりを見つけ得たならばとねがうものである。